

# 福祉・医療制度を考える

小見川 香代子

「鳥の目」「蟻の目」、この2つの視点はこの場面でも考えられる。  
会社の組織においても、国の組織でも……

確かにどちらに偏ってもアンバランスになる。

しかしながら、「蟻」から見ればあまりにも、「蟻」の世界を知らなすぎるのではない  
かと思ってしまう。本気で考えるのならば、1ヶ月、いえ1週間でも、1日でも、「蟻」  
の世界を体験してほしい。体験したものでなければ、その不自由さはわからない。

介護の世界は非常に過酷である。

低賃金・重労働、しかしそれを支えているのは介護職を希望する人たちのボランティア精  
神に他ならない。

医療職の人たちは、主張する手段を持っている。医師会・歯科医師会・薬剤師会等々、  
政治的に訴える手段がある。

介護職の人たちは、主張する手段を持っているが、あまりに煩雑すぎて主張が曖昧にな  
っている。ケアマネ・ヘルパー、介護福祉士……さまざまな団体があるが、強く訴え  
る手段がそれぞれ曖昧になっている。

講義の中で、医療職と介護職の違いは「専門性」といわれた。

確かにそれもある。

医療職は生命の危機にかかわる職業であるのに対し、介護職は生きていくための手段に  
かかわる職業である。

その職業の位置づけが、広く国民に理解されていない。

介護が始まった頃、ヘルパーさんを家政婦さんと間違える人も多かった。

今もそういう人はいる。

専門性を高める必要もあるが、広く国民に、介護についてわかりやすく理解してもら  
う手段も必要だと思う。

また、医療制度についても、小学生の頃からもっと啓発活動を行っていくべきだと思う  
。

私は薬剤師であるが、他国では個人の医療に対する興味が高く、自分の薬について詳し  
いと聞く。何十種類もの薬を飲むこと、あまらせるほど薬をもらうことこそが医療費の  
圧迫だと考える。ジェネリックを推進しているが、他国と違い数多くの薬品メーカーが  
ジェネリックを販売している日本では、煩雑になるだけである。本当に目を向けなけれ  
ば行けないのは、個人のもつ不要な薬ではないだろうか。また、予防医学を広く啓蒙す  
る必要があるように思う。

いつの間にか「医は仁術」から「医は算術」に、「鳥の目」は変わってきているように  
思いながら「蟻」は、遠く離れていく「鳥」を見ている。